

# 二科会展覧会雑感

寺田寅彦

青空文庫



同じ展覧会を見て歩くのでも、単に絵を見て味わい楽しもうという心持で見ると、何かしら一つ批評でもしてみようという気で見るとでは、見る時の頭の働き方が違うだけに、その頭に残る印象にもかなりの差があり得る訳である。尤もほんとうに絵を味わい楽しむためには、ある意味での批評をしなければならぬ事は勿論であるが、しかし、意識的に批評のための批評をしようという心持があつては、芸術品を楽しみ味わう邪魔になるばかりでなく、却つて本当の正しい批評をすることの障しょうがい碍がいになりはしまいか。この点はプロフェッショナルな批評家の、苦心の要るところだろうと想像される。

自分等のようなものが絵の展覧会を見るのは、何時でも絵を見て楽しむためである。だから、如何いかに評判の絵でも、自分に興味のないものは一度きりで見ないで済むし、気に入った絵なら誰に気兼ねもなく何遍でも見て楽しむことが出来る。このような純粋な享樂は吾々素しろうと人に許された特典のようなものである。そうして、自分等がたとえ玄くろうと人の絵に対して思ったままの感じを言明しても、それは作者の名誉にも不名誉にもならないという気安さがある。これは実に有難い事である。無責任だというのはないが、何人なんびとをも傷つけること無しに感情の自由な発表が許されるからである。

そういう前提を置いて、今年の二科会展覧会の絵を見たままの

雜感を書いてみる事にする。

安井氏の絵がやはり目立って光っている。なんだか玉ぎよくか蠟ろうせき石を溶かしたもので描いてあるような氣持がする。例えば、白ばらの蒼つぼみの頭の少し開きかかった底の方に、ほのかな紅色の浮動している工合などでも、そういう感じを与える。デリベレイトに狙いすましては一筆ずつ著つけて行ったものだろうと想像される。そういう点で、これらの絵は、有り来りの油絵よりは、むしろ東洋画に接近しているかもしれない。

この人の絵には詩が無いという人もあるが、強あながちそうでもないと思う。少なくとも今年の花や風景には、たしかに或る詩と夢がに

じんでいる。忠実に自然を掘り返していれば、そこから詩の出て来ないという法はない。

裸体も美しいが、ずっと遠く離れて見ると、どこかしら、少し物足りない寂しいところがあるように感ずる。何故だか分らない。人体の周囲の空間が大きいせいかもしれない。

山下氏の絵は、いつでも気持のいい絵である。この人の絵で気持の悪いという絵を自分がかつて見た事がない。この人の絵は、どこかしらルノアルとモネエと両方を想い出させるようなところのある絵だと思う。しかしあまり強い興奮を感じさせられる事のないのはどういふ訳だろう。あまり何時でも楽々と画かれているように見えるせいかとも思う。

楽にかいてあるようで、実は恐ろしく骨の折れたと思われる絵がある。安井氏のがそれである。これと反対に恐ろしく綿密で面倒臭そうで、描いている人は存外気楽で、面白くてたまらぬような絵があるとすれば、それは横井弘三氏のである。ルノアルなどは、ちよつと見ると気楽に描いているようだが、また恐ろしく神経を使っているようにも思われるのだが、横井氏のはそれともちがう。

椎塚<sup>しいづか</sup>氏の綿密な静物が私に与える感じは、丁度グロテスクの感じと実質的に同じ感じである。それは必ずしもグロテスクな題

材を取扱ったものでなくても、そうである。

これと反対に、例えばザツキンの妙な人形の絵など、随分形式的にはグロテスクに出来ているが、感じの内容には、どこかある明るさと愉快さがある。

ロオトの絵がある。どこがいいのかよくは分らない。この人の似通った日本人の絵も沢山あるようだが、でも、この人の中にはどこかに、こせこせしない、のびやかなところがあるような気がする。少し思い切って遠く離れて見ると一層そんな気がする。

アスランでもビツシエルでも、出来不出来は別として、やはりその人の絵になっていると思う。そして妙に焦<sup>あせ</sup>ったようなところ

の見えないだけは気持がいい。

正まさむね宗氏の絵が沢山ある。自分はどうした訳か、この人の使用

する青や緑と朱や紅との強い対照の刺戟が性に合わないせいでもあるか、どうも親しみを感じる訳に行かない。これは好きな人にと取っては好きな特徴となるに相違ない。しかしこの人のような絵はじきに行き詰ってしまうような事が無いからその点が頼母たのもしいと思う。

石井氏の絵は、いつも、常識的という評を受けるようである。

頭のいい、要領のいい点は、そういうところもあるだろうが、そ

うばかりとも思われぬ。一種の淡白な味を味わってみる事は虚心な鑑賞家にとって困難ではないだろう。この人の絵をだんだんに突きつめて行くと、結局マルケエなどのような方面へ行きはしないかという気がする。

津田氏の日本画は一流のものであるが、今年の洋画はただの一点で、それがあまりに投げやりである。

鍋井<sup>なべい</sup>氏の絵は少し変ったようである。こういう絵も自分はわりに好きな方ではあるが、ただ変るところまで変る途中にあるような気がした。来年を楽しみにしている。

横山氏の絵はかなりうまいと思うが、好きにはなれない。これは趣味の相違で仕方がない。この人の絵は、とにかく一通り行くところまで行つて、行き止まつているような気がする。こういうたちの絵は、じきにそういう風になりやすい。一体に表現的な芸術はそうだろうと思う。絵を描くよりも、表現すべき自己を開拓する方の努力がもっと重大である。それがためには、しばらく絵筆をすてて物に親しむ事に多くの時を費やす必要がある。

えびはら  
海老原氏

の変つた絵がある。こういう種類の絵が、作者にどれほど必然であるか、が何時でも自分には分らない。例えばルソオ

などという人はおそらく、ああいう絵より外の絵は描けなかった人だろうと思うが。——とにかく形式はルソオのようなどころはあつても味はまるでちがうと思う。

田中豊三郎氏の人物二枚も随分變つてゐる。しかしこの人のには、どこかしらこの人のオリジナルテイがある。誇張したようなところにもどこか素直な、のびやかなところがあると思う。だんだんに善いところと悪いところを篩ふるい分けて進むといいかと思う。

上かみやま山氏の「金魚と花」というのがある。こういう絵は虚心で見ると面白いところもあるが、しかし、自分は、何となく欺だまされ

るのではないかという気がして困るのである。それはとにかく、  
こういう絵は、もう少し清潔に仕上げた方がよくはないかと思う。  
絵具をのせる地質の研究が要る。

つねかわ  
恒川氏の風景画には、ちよつと南画のような味がある。しか  
しこういう絵もこのままではすぐ行き詰りになりやすい。

円筒形の上の断面を楕円形に表わして、底面の方は直線でか  
てしまう事が流行するようである。こういう流行は永くはつづく  
まい。

「天然」と絵具だけからは絵は生れないし、「自己」と絵具ばか

りからも絵は生れない。自己と天然と真剣に取組み合わなければ駄目だと思ふ。昔は天然と絵具だけで出来た無意義な絵が多かつたが、近頃は反対に自己と絵具だけの空虚な絵が多くなつた。こういう絵にとっては自己がどんな自己であるかが生命である。それを充実させるためには、やはり天然の資料を豊富に摂取する事が須<sup>しゅ</sup>要<sup>よう</sup>である。資料の供給の無い自己はやがて空虚になる。そして空虚な自己の表現は芸術にならない。

林<sup>たけし</sup>武<sup>し</sup>氏の絵は今年はあまりふるわない。しかし、こういう風に、いい加減なところで収まってしまわないで、何かしら煩悶しているような未成の絵は、やはり頼母しいという感じを起させる。不

出来でも何でも、とにかく自分の絵を描こうとしているように見える。フランス人の画を見てすぐに要領を修得したような軽薄な絵を見るよりは数倍気持ちがいいと思う。

未来派の絵というと、ギターが出て来るのは、あれはどういう理由によるのだろうか。他にも同等もしくは以上に適当な題材はいくらでもあるだろうが。

中川紀元きげん氏の裸体画を見ていると、何だかある甲虫を聯想するが、何だという事が、はつきり思い出せない。この聯想はあるいは主としてあの女の右の足から来るのかもしれない。この絵など

が、自分にはあまり楽しめない方の部類に属する。

展覧会によつては、殊に日本画の展覧会などでは、とても二目ふためと見る気のしない絵が随分あるが、二科会などでは、そんなのはあまり多くは出会わないようである。これは世辞ではない。

展覧会の評というと、徹底的に賞めちぎるか、扱こき下ろすかどつちかにしないと、体をなさないかもしれないが、これは批評でも何でもないのでから、こんな甘い、だらしのないものになつても致し方がない。

(大正十三年十月『明星』)





# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第八卷」岩波書店

1997（平成9）年7月7日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 文学篇」岩波書店

1985（昭和60）年

初出：「明星」

1924（大正13）年10月1日

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2006年7月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 二科会展覧会雑感

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>